

「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」

第6回神奈川ユニットセンター連絡協議会

日時：平成27年1月7日（水）15：00～17：00

場所：ヨコハマプラザホテル5階芙蓉の間

〒220-0011 横浜市西区高島2-12-12（TEL：045-461-1771）

議 事 次 第

1. 開会挨拶（センター長 平原 史樹）
2. 来賓あいさつ
国際医療福祉大学熱海病院院長 横田 俊平 様
3. 出席者紹介
4. コアセンターからのご報告（資料：エコチル調査の現状と今後の展開）
コアセンター次長 吉口 進朗 様
5. 議題
資料1 1か月健診までの総括
資料2 6か月以降の進捗状況
資料3 フォローアップへの取り組み
資料4 詳細調査
6. 閉会挨拶（副センター長 伊藤 秀一）

以 上

参加者リスト

所属	職名	氏名	代理出席	代理出席者
エコチル調査コアセンター	次長	吉口 進朗		
国際医療福祉大学熱海病院院長	(顧問)	横田 俊平		
神奈川県保健福祉局保健医療部健康増進課	副課長	渡邊 智幸		
神奈川県大和保健福祉事務所大和センター	所長	中井 信也	副技幹	畠中 晴美
横浜市健康福祉局保健医療医務監・こども保健医務監		辻本愛子		
横浜市金沢区福祉保健センター	センター長	富田 千秋		
小田原市子ども青少年部子育て政策課	課長	飯田 義一		
大和市こども部こども総務課	課長	山崎 晋平	担当係長	大澤 美穂子
横浜南共済病院 産婦人科	部長	飛鳥井 邦雄		
横浜南共済病院 小児科	部長	成相 昭吉		
横浜南共済病院 事務	部長	松岡 博		
小田原市立病院 産婦人科	部長	平吹 知雄		
小田原市立病院 小児科	部長	松田 基		
小田原市立病院 病院管理局	局長	柳田治夫	医事課	三次 健
大和市立病院 産婦人科	部長	石川 雅彦		
大和市立病院 事務局	局長	池田 直人		
神奈川県小児科医会・小田原市 医師会会長	会長	横田 俊一郎		
金沢区三師会	会長	小田兵馬		
横浜市金沢区医師会	会長	池川 明		
横浜市立大学 大学院医学研究科生殖生育病態医学	教授	平原 史樹		
横浜市立大学 大学院医学研究科発生成育小児医療学	教授	伊藤 秀一		
横浜市立大学 エコチル調査事務局	特任准教授	川上 ちひろ		
横浜市立大学 エコチル調査事務局	特任助教	佐藤 美保		
横浜市立大学 エコチル調査事務局	特任助手	後藤万紀		
横浜市立大学 エコチル調査事務局	特任助手	田中絵理		
横浜市立大学 エコチル調査事務局	特任助手	新田優子		
エコチルママ・パパ 8名 他2名				

議事録

1. 開会挨拶（センター長 平原 史樹）

本研究の主役は参加してくれているお子さん・お母さん・お父さんだと思っている。従って、神奈川ユニットセンターでは協議会にエコチルに参加してくれているお母さんやお父さんにもご出席してもらい、色々な意見を聞いていこうと思っている。協議会はお母様たちの意見を聞きながら、進めていきたい。

2. 来賓あいさつ（国際医療福祉大学熱海病院院長 横田 俊平 様）

横浜市立大学でいつまでも小児科医をしていたかったが定年という制度があり、今は熱海の病院で地域医療を行っている。高齢者問題・地域医療の問題など考えていかなければいけない問題がたくさんあり、大変である。

横浜市大小児科教授としてエコチル調査に参加しようと思ったきっかけは、そもそも神奈川県のお子さんの健康状態を知り、小児科医がかかわりながら、成長していつもらいたいと言う思いがあったから。この調査を継続する上でのメリットはなにか。次世代の子どもたちのために今の子どもたちとどのようにかかわっていくのか。など、考えて行かなければいけないと思っている。

3. 出席者紹介

参加者リスト参照

4. コアセンターからの報告（コアセンター次長 吉口 進朗）

調査の目的は、環境要因が子どもの健康に与える影響を明らかにすること。リクルートは予定の10万人を超え、10万3千人に達した。フォローアップ状況として、お子さんの出生数は9万8千人に上っており、最年長は3歳半である。質問票の回収率については、生後6か月質問票の回収率が90-95%程度であったが、年齢が上がるごとに悪くなってきている。お子さんの質問票以外に、疾患情報登録調査や詳細調査も行っている。データの解析はデータクリーニングを経て行うが、一次固定データ（2011年末までの出産済みデータ）の解析が始まっている。

今後の課題は、調査実施者と参加者とのコミュニケーションを確保しつつ、質問票回答の協力継続をしてもらうことである。質問票の回収率が徐々に落ちてきているので、低下防止策を検討する必要がある。一部の参加者を対象とした詳細調査は医学的検査や発達検査等を行う、円滑に調査を実施するためには地域の小児科医の協力が不可欠であり、これまで以上の連携・協力体制の構築が必要である。

5. 議題

池田：6か月質問票以降の返送率について、お母さんの年齢構成と返送率の間には相関関係はないのか。大和市では若年出産が比較的多いと承知しているが、若年で出産された方の返送状況についても知りたい。また、大和市は厚木基地を抱えており、騒音問題がある。また、低体重も問題となっており、騒音と低体重の関係なども調べる予定があるか知りたい。

平原：低体重については分析の仕方にもよる。

川上：3歳時の詳細調査で家庭訪問したときに騒音についても調査する予定であるので、騒音と低体重についても調べることが可能になるかもしれない。

参加ママ：うちの子は、2500gと少し小さく生まれたが、今のところ問題はなさそう。3-4歳になったときに大きくなっているかななどを調べることも必要なのではないか。

平原：先進国の中で日本は唯一出生時体重が減少してきている。3000g以下になっているので、何かあるのではないかと考えている。

横田：2500g以下と未熟児の子どもが、先進国では平均5%以下なのに対して、日本は10%いる。小児科医としても、低体重は深刻な問題であると思っている。環境との問題がエコチルでわかってくれば対策を検討することも可能となる。

調査票の回収状況について、人口流動の多い大和市と、比較的少ない小田原市とでは影響も違ってくるのではないと思われる。病院・行政・地域が一体となって対応していくことで回収率も上げられるかもしれない。

参加ママ：質問票に、例えば「ビーズが通せるか」「マカロンが通せるか」などの質問があるが、そもそも家にそのようなものがないので、試すことができない。「たぶんできるだろう」ということで回答している。実際に見に来てもらえたらいいなと思う。アレルギーや肥満などは親の影響もあると思うが、両親は調べないのか。

川上：全ての方の自宅まで行って質問票の項目ができるかを見ることは難しい。両親については、2年に1度ぐらい身長・体重を聞いているので肥満傾向はわかる。アレルギーも血液検査の中にアレルギー検査があるのでわかるようになっている。

参加ママ：(質問票の回収率低下について)

何に協力しているのか見えなくなっている。自分が参加している実感がない。エコチルを知らない人が多いので、エコチルの認知度を上げてほしいし、自分もやっていることを認めてほしい。

参加ママ：引っ越しをして調査対象地域に住んでいないので、周りにエコチルを知っている人が全くいない。地域外に転居してもその地域の人たちがわかっているとやりがいもある。

平原：エコチルに参加してもらっているおかげで「こういうことがわかった」とか「質問票で回答してもらうことでこんなことがわかるようになる」などの情報がきちんと伝わるようにしていく必要がある。

エコチルカードのようなものを作って、転居しても医療機関で相談が受けられるような仕組みを作りたかったが、なかなか難しく実現できなかった。

川上：お薬手帳を作ったのは、医療機関や薬局でエコチル調査の参加者だということを知っていただくため。

横田(小田原)：母子手帳にあるシールを見たことはあるが、エコチル参加者からエコチルに参加していると言われたことはないしお薬手帳はみていない。また、他の小児科医がどの程度認知しているかもわからない。小田原市内の医療機関にはエコチルポスターを配布したが、院内に張るかどうかはそれぞれの判断になる。しかし、参加者以外の人もエコチル調査のことを知っていることが重要だと思う。

松田：普通に受診しても母子手帳は出さないで母子手帳は見なくなる。エコチル参加者だと認識できない。

平原：子どもたちがもう少し大きくなったときに自分はエコチル参加者なんだと自覚してもらうような取組が必要だと思う。

伊藤：医療機関に貼ってもらうポスターなどを目につくようなものにして、普及させる。

平吹：ポスターも古くなってきている。新しいポスターにしていった方がいい。エコチルの参加してくれているんですねの一言が医師からあるだけでも参加者のモチベーションはアップすると思う。

金沢区：HP・パンフレット・ロコミなど広報を工夫して、参加者以外にも共感を持ってもらえるようにする。何かの手法で伝えていくことが大事。

小田：いままでに2名、エコチルお薬手帳を提示した方がいたので、その方たちにはお声掛けをした。

大和市・小田原市：エコチル育児相談はいつまでやってもらえるのか。

川上：エコチルの子どもが育児支援センターに行く年代のうちは予算確保も可能だと思うが、それを超えてしまうと難しくなる。環境省には、行政とのつながりのためにも継続させてほしいということをお願いするつもりでいる。

大和市：いままでは市の方で保健師などが対応していた相談業務に小児科医が加わってくれたことで、行政の仕事を小児科医に理解してもらえたり、育児中のお母さんの悩みをわかってもらえたりと大変助かっている。気になるお母さんなどを連携してみてもらえる。ぜひ、続けさせてほしい。

金沢区：今後は教育機関にも働きかけて、子どもから親に「エコチル」を伝えていくことも大切になってくる。学校との連携も必要。子どもに環境問題について、意識してもらうことも大切。

参加ママ：健診に行っても保健センターの先生がエコチルを知らない。もっと認知度を上げてほしい。

この間、FM 横浜でエコチルのことを聞いた。環境問題には関心があるが難しいことはわからない。子どもも参加できるようなイベントなどを開催して、環境問題などをわかりやすく説明してほしい。

6. 閉会挨拶（副センター長 伊藤 秀一）

小児科医全体で認知度を上げて行かなければいけないと思うので、学会 HP 内にリンクしてエコチル HP へ行けるようにするとか、雑誌で特集号を組むなどの取り組みをしていけるよう働きかけていきたい。少子高齢化なので、少ない子どもが健康に育つ環境を作っていくことが必要である。

以 上